正課外での学び / 地域を学びの場とした活動 / サービスラーニング

立命館大学における正課外での学びは、地域を学びの場とするなど多様です。サービスラーニングは、学生たちが地域の人々との社会的な関係のなかで地域に貢献をする一方、地域からも学んでいく体験的な学習手法です。

経営学部　教授　**木下　明浩**

立命館大学における正課外での学び

正課外での学びとは、卒業や教職資格取得など必要な単位修得に直結してはいない学びのことを指します。学士課程教育において学ぶ「学生は自ら目標を立てて学修し、社会に積極的に貢献するための能力と知識を獲得して卒業することが求められます」（「2011年度全学協議会確認」）。大学での学びは、正規の単位修得に結びつく正課での学びを必要不可欠としますが、「正課と連続した自主的学びの活動、正課外や課外自主活動、キャンパス内外を問わない活動」をも意味します。

授業内外にわたる正課での学びは、正課外での学びの基礎をなします。正課での学びという土台のない正課外での学びは大学での学びとは言えないでしょう。正課で学んだ知識や理論、抽象的思考力、具象への応用力は、正課外での学びに生かすことができます。逆に、正課外での体験学習を通じて、正課で学んでいる内容の社会的意義、幅と奥行きを理解することができて、学習への動機づけが与えられます。正課と正課外の枠を越えた学びを通じて学生は主体性と社会的能力を伸ばしていきます。

立命館大学における正課外での学びを制度面からまずは取り上げてみましょう。学術活動を例に挙げますと、学生課外活動における学術部には32の公認団体、７の同好会、7の任意団体があります（「立命館大学ウェブサイト」（http://www.ritsumei.ac.jp/event-sports/event/profile.html/、2015年11月25日閲覧）。各団体では、それぞれの特徴を生かして、立命館大学の外に出て、全国的な大会で日頃の成果を発表したり、フィールドワークに出かけたり、ボランティア活動をしています。大学の中にあっては、成果発表に向けて地道な勉強会をするなど、集団的・社会的な学びを実践しています。ただし、集団的な学習活動も個人の地道な学び抜きには成り立ちません。

正課外活動は、文化芸術活動を担う学芸総部の公認団体・同好会・任意団体、スポーツ活動を担う体育会公認団体・公認同好会、立命館大学応援団などの中央事業団体、自治会（自治委員会）やオリター・エンター団などの中央パート、課外自主活動団体（登録団体）によって担われています。およそ半分の学生が、大学の把握している課外自主活動に参加しています（立命館大学『学園通信　学生生活・キャリア形成・課外自主活動版』2011年6月）。

正課外での学びの２つめの例として、サービスラーニングセンターの募集するボランティア活動、学生のボランティア活動を支援する学生コーディネーターの活動を挙げることができます（「立命館大学ウェブサイト（http://www.ritsumei.ac.jp/slc/）」を参照のこと）。たとえば、2015年度は資料１のようなボランティア体験プログラムが実施されています。学生の気づきや学びが以下のような声に表われています。「地元の農家の方に指導をいただいたことで、体験を考察し学びに変化させていくための知識の補完

参考文献

クレイトン・M・クリステンセン他　『イノベーション・オブ・ライフ』翔泳社　2012年
桜井正成・津止正敏（編著）『ボランティア教育の新地平―サービスラーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房　2009年
門脇厚司　『社会力を育てる―新しい「学び」の構想』岩波新書　2010年

が可能となった」、「他大学の学生と交流することで、地元の地域活性化に繋げる取り組みについて学ぶ機会を得た」などです。

資料１　サービスラーニングセンター主催のボランティア活動の一例

ボランティア体験プログラム（連携団体：ＮＰＯ法人里山ねっと・あやべ）

実施日時：2015年９月22日（火・祝）～24日（木）／２泊３日
実施場所：京都府綾部市かじや周辺地域
活動内容：①遊歩道の階段作り
②道路沿いにあるサツキの植え込みの雑草取り
③そばの種まき、レタスの苗植え、
田んぼの用水路の砂利上げ
④ＦＭラジオ出演

地域を学びの場とした活動

大学生の学習方法は、個人学習、学生どうしのグループ学習、教員と学生とのディスカッションなど多様です。地域を学びの場とする活動は、地域の人々との社会的かつ互恵的な関係の中で体験的に学ぶことであり、学生は大きな成長を得ることができます。

本学サービスラーニングセンターによる正課外プログラム、「大船渡夏まつり・盛町七夕まつりサポートプロジェクト2015」は、岩手県大船渡市と復興支援に関する協定を締結し、大船渡夏まつりサポートを中心に復興支援だけではなく地域活性化の取り組みを行う企画です。立命館大学生27名が2015年夏に、活動日６日間のボランティア活動を岩手県大船渡市盛町にて行ないました。ボランティア活動への準備と成果確認として、オリエンテーションと毎日のふり返り、そして最終ふり返りをしています。現地での活動前後に、大学にて事前学習と事後学習があります。

学生は、震災についての理解、復興支援活動のあり方、現地の方とのコミュニケーションの心構えなど、震災および復興支援に関する知識と認識を深めました。重要なことは、学生が具体的な提案・計画・実行をしていったことであり、それは学生の社会的な学びを育む上で意義深いものとなりました。しかし、住民の方に参加してもらえない、被災住民のお話は学生には受け止めきれない内容も多いという困難な状況にも直面したことについて、学生どうしがふり返りをするなかで、言葉に表現していきました。

地域住民の生活に寄り添いボランティア活動に取り組むことは、学生にとってどのような学びとなるのでしょうか。参加する学生は、①他の参加学生、②学生のボランティア活動を支援する立命館大学の教職員、③ボランティアの企画・受け入れ団体の職員の方、④地域住民のリーダーや一般の地域住民など多様な社会的関係性のなかで、地域におけるボランティア活動を学んでいきます。

学生は、活動を通じて、東日本大震災に対する思いや大船渡市盛町の課題である少子化やお祭りの担い手の高齢化に対する取り組みなど、そこに住む人々の思いに触れ、復興支援、地域活性化の意味について学びを得る機会となるでしょう。また他者との関わりの中で思うように進まないことも多いでしょう。地域住民の学生に対する反応や話しかけは、学生に対する新たな学びとなることも多いはずです。

学生は、ボランティアの企画・受け入れ団体の活動を身近に見る機会があれば、ボランティアの企画や受け入れに携わる組織の支えがあってはじめて地域におけるボランティア活動が成り立つことを学ぶことでしょう。ボランティア活動参加者の寝泊まりの確保などの物的な体制を整える必要もあります。また往復の交通費や怪我などに備えた保険など一定の費用もかかります。このようにボランティア活動には人的・物的・資金的な体制が必要であることを学生は知ることになるでしょう。

本学でも、立命館災害復興支援室が、2011年3月に起こった東日本大震災への支援を契機として設置

され、学生のさまざまなボランティア活動を行う「後方支援スタッフ派遣」「学生が取り組むボランティア活動派遣支援」など、2015年3月までにバス等でのべ1,000名以上のボランティアを派遣し、復興に向けた取り組みを行ってきました。（詳しくは「立命館災害復興支援室ウェブサイト」（http://www.ritsumei.ac.jp/rs/20110311/）を参照のこと。）

チーム内で活動内容の詳細を詰めたり、ふり返りを通じて学習したことと課題を言葉に出してまとめたりするという点で、学生は、学生どうし、教職員、地域住民、ボランティア団体の方との言葉と行動のやりとりの中で、相手に貢献すると同時に、自らも相手側から個別的または集団的に学んでいきます。地域の中で学生が学ぶことの意義は、多様な社会的関係性の双方向のやり取りの中で、お互いが貢献し学び合うことを体験することにあります。

サービスラーニング

近年サービスラーニングという学習方法が大学で導入されています。サービスラーニングとは、地域での貢献活動を通して、学生が社会的な関係性のなかで学びと体験を深めることができる学習方法のことです。参考文献２（桜井正成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』10-11ページ）では、サービスラーニングの２つの特徴として、①「サービス（奉仕）を通じて、現実社会への何らかのインパクトを与えること」、②サービスラーニングは「たんなる体験ではなく、構造化された教育的取組である」ことを示しています。この指摘をふまえ、ここでは「地域での貢献活動」、「学生の学びと体験を深める学習方法」、「社会的な関係性のなかでの学びと体験」という３点について考えてみましょう。

第１の地域社会に対する奉仕は、サービスラーニングの不可欠な要素です。ここで取り上げた正課外での学び、「ボランティア体験プログラム」と「大船渡夏まつり・盛町七夕まつりサポートプロジェクト」は、「農作物の種まき・苗植えや用水路の砂利上げ」ないしは「盛町七夕まつりの運営サポート、大船渡市での復興支援活動、地域の方々との交流」といった目に見える地域社会への奉仕活動を行います。その点で、大学授業における実習、インターンシップ、フィールドワークは必ずしも地域社会への貢献が必須ではない点で、サービスラーニングとは異なります（参考文献２、11ページ参照）。

第２にサービスラーニングは、学生の学びを促すようなしくみが準備されています。事前学習では、相手先である地域コミュニティについての情報をふまえつつ、参加学生は、ボランティア活動の内容理解と、活動を通じた具体的な目標を立てます。ボランティア活動の修了直後、学生は、言葉に出して「ふり返り」をすることで、体験を通じてはじめてわかったこと、当初の目標どおりできたことあるいはできなかったこと、思いがけずに相手から感謝されたりあるいは教わったりしたことなどを、自分自身の言葉で語り、体験から得た学びを言語化していきます。大学に戻って、たとえば１週間後には事後学習を行います。場合によれば、「自分の成長と気づき」「ボランティア活動を通して見えてきた地域・社会問題」などの事後報告を文章にまとめることもあるでしょう。このように、サービスラーニングは「内省」（reflection）をすることでより深い学習効果が生まれます。

第３のサービスラーニングにおける「社会的な関係性のなかでの学びと体験」とは、学生が地域の人々に対して働きかけ貢献すると同時に、地域の人々から学ぶことを意味しています。地域の人々に即して言えば、彼らはボランティア活動の一方的な受け手であるわけではなく、地域コミュニティがボランティアを行う主体に対して知恵や勇気、感動を与えたり、社会的な問題関心を芽生えさせたり深めさせたりする点を見落としてはなりません。サービスを提供する主体とサービスを受ける主体が相互に学習し高め合う対等の関係性、すなわち互恵性（reciprocity）が、サービスラーニングにとって欠かせない視点です。

サービスラーニングという教育および学習の手法は、それぞれの学部で取り組まれています。また教養科目のＣ群（社会で学ぶ自己形成）の科目としても、「地域参加学習入門」など、2015年度は全学で６科目27クラス開講されています。正課外の学びとしても、サービスラーニングセンターは、短期のボランティ

ア活動の学びや実施など種々の活動をしています(「立命館大学サービスラーニングセンターウェブサイト」http://www.ritsumei.ac.jp/slc/ 参照)。サービスラーニングは何も日本の地域社会に限定されるものではありません。世界の地域の人々との互恵的な体験学習を通じて、学生のみなさんは能動的な学びを進めていくこともできます。

豊かな学びに向けて

最後に正課外での学びを別の角度から述べます。みなさんはなぜ立命館大学に進学したのでしょうか。大学卒業の肩書きを得て就職するため、または大学進学が当たり前になっているからなのでしょうか。アメリカの有名なビジネス・スクールの教授であるクレイトン・クリステンセン他が執筆した『イノベーション・オブ・ライフ』翔泳社(１つめの参考文献)は、経営学の理論を用いて個人の人生を考えています。ビジネス・スクールでの最終授業で教授は以下の３つの質問を学生に投げかけます。

・どうすれば幸せで成功するキャリアを歩めるだろう？
・どうすれば伴侶や家族、親族、親しい友人たちとの関係を、ゆるぎない幸せのよりどころにできるだろう？
・どうすれば誠実な人生を送り、罪人にならずにいられるだろう？

クリステンセン教授は、一見簡単な質問に思えるが、教授の同級生の多くが一度も考えることをしなかった質問であると述べています(以上、１つめの参考文献、1-8ページ)。みなさん大学生は、人生の目的を考える重要な時期です。みなさんならどのように答えるでしょうか。

教授は、同書のなかで、「子どもは何のために、どのような問題を解決するために学校に行っているのか」と問うています。そのうえで著者は、「生徒に勉強を頑張るべきだとただ言い聞かせるだけでは、学習意欲を高められるはずもない・・・達成感を得ること、友人たちと一緒にものごとに取り組むことを片づける助けになるような体験を提供する必要がある」と述べています。大学生という自立した学習者の立場からとらえ返してみましょう。みなさんが望んでいることは、困難な学びに挑戦しての達成感、一緒に取り組むような学びに挑戦し真にお互い助け合えるような友達が、大学での正課・正課外での学びと体験を通じて得られることであるはずです。

またクリステンセン教授は、「リーダーが必要な能力をすべて生まれながらに備えている」わけではない、「むしろ能力は、人生のさまざまな経験をとおして開発され、形成されていく」と述べています。学生には、地域社会の人々や学生どうし、教職員などとの学びを通して、将来社会に貢献できる能力を身につけていってもらいたいものです。

このような教授の問いかけは、正課での学びによって得られることもあるでしょうが、社会的な広がりをもった正課外での学びとも合わせてこそよりよく考えられ答えられるのではないでしょうか。みなさんの正課と正課外での学びが、広がり深まっていくことを期待しています。

考えてみよう

- １つめの参考文献を読んだうえで、本文に記した３つの問いに自分なりの答えをまとめてみよう。さらに、同じ課題をした学生どうしがグループを組んで話し合ってみよう。
- ２つめの参考文献を参考にして、サービスラーニングという学習方法の良い点がどこにあるのか調べ、グループで話し合ってみよう。またサービスラーニングが効果を高めるためには、学生としてどのような点に気をつけなければならないだろうか。
- ３つめの参考文献を参考にして、大学生の「学び」のあり方について自分なりに考え整理してみよう。そのうえでグループでお互いの意見を戦わせてみよう。